

潟船保存会

その三

潟 かた

語 がた

り

(三十五)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

大崎の三浦新七さんは昭和24年生まれ。干拓前の潟の広大な風景を知り、きれいな潟で遊んだ最後の世代かも知れません。潟船保存会の事務局長でもある三浦さんに、冬の大崎地区の子どもの遊びについて語っていただきました。

氷の張った潟に出かける子どもはいませんでした

春から秋にかけて天気の良い時は潟が遊び場だったけど、冬は潟には誰も行かなかった。当時は今より寒い日が多く、潟は毎年のように結氷。今は氷に穴を開けてワカサギ釣りをする人もいますが、私が子どもの頃は誰もワカサギ釣りはしなかったし、そんな釣り方があるということすら知りませんでした。

冬の遊びの代表的なものは、竹スキーや下駄スケート。潟端はほとんど平坦な土地でしたが、私の家の近くの諏訪神社の向かいには、ちよつとした斜面があった。スキー場兼スケート場のような場所で、学校が終われば大崎の子どもたちのほとんどはここに集まりました。竹を切って自分で作った竹スキーで遊ぶ子もいれば、下駄のように鼻緒の付いている下駄スケートで滑る子もいた。子どもたちがこの狭い斜面に集まって毎日滑るもんだから、斜面は氷のようにツルツル。そうそう「たすけ」という遊びもありました。

大人たちは冬になると、潟の漁業は一休み。水下漁をする地区もあったけど、大崎は田んぼを持っている家が多く、ほとんどが

半農半漁。冬の間は雪の上を渡って田んぼに堆肥を運ぶ作業をしていました。大人たちが堆肥を背負い、黙々と雪原を歩いていた光景は今でも忘れることができません。

＊お知らせ＊

潟船保存会「平成21年度地域づくり総務大臣賞」を受賞

三浦新七さんが事務局長を勤める「潟船保存会（石川久悦会長）」が「平成21年度地域づくり総務大臣賞」を受賞しました。これは地域をよりよくしようと頑張る団体・個人が表彰されるもので、団体表彰を受賞したのは全国で20団体、秋田県内では2団体です。平成7年に発足した同会は潟の文化の継承や、八郎湖の水質改善への長年の取り組みが高く評価され受賞しました。

潟船保存会の
方々が集めた魚
具や農具は天王
公民館にも保管
されている

木の枝と縄で作ったカゴ
このカゴに堆
肥を入れて
背負って運ぶ



ワラで作った
スリッパのよ
うな履物を持
つ三浦新七さん